

【論説】

善光寺門前町の「雲切目薬」について

越 川 次 郎

はじめに

本稿では、善光寺（長野市）の門前町で現在も販売されている「雲切目薬」についての報告と若干の考察である。「雲切目薬」の由来伝承は複数あるが、それらによると室町時代から江戸時代初期に成立したとされる。1980年代前半に一時途絶するが、1997年に復活し現在まで販売されている。筆者は、2024年から「雲切目薬」の販売元である笠原十兵衛薬局に残されている製薬・販売関連資料を記録させていただいている。ここでは、「雲切目薬」について概観したうえで、笠原十兵衛薬局所蔵資料を含めた関連資料を紹介しながら若干の考察をのべていくこととする。

1 寺院売薬研究小史

売薬の歴史学的な研究は、昭和初期刊行の『日本薬業史』（池田 1929）などの通史をはじめ、時代史、地域史、さらに富山売薬や毒消し売りなどの個別の売薬史など多岐にわたって数多くの業績がある。しかし、家伝薬は調査や記録が見られるものの、現状では寺院売薬はほとんど顧みられることがない。筆者はこれまで、廃絶・現存双方の寺院売薬を調査し、それらの歴史を明らかにした。これまでの研究から筆者が実感していることは、未確認の廃絶した寺院売薬が多数存在しているということである。記録もされず、人々の記憶からも消えていこうとする売薬が多数あると考える。寺院売薬は、その属性から成立伝承を始めとする豊かな伝承を持っている。また利用する人々は寺院の信仰や自身の有する宗教的信条を参照しながら、自身の宗教生活や日常生活に薬を位置づけて利用するなど、独特の精神文化が形成されている。そのような多くの寺院売薬と文化が、その存在すら知られぬまま永久に失われかねない。

本論で取り扱う、善光寺門前町で販売されてい

る「雲切目薬」は、度々メディアにもとりあげられる有名売薬である。しかし、この「雲切目薬」でさえその由来や歴史をはじめ、製薬・販売道具および文書資料などの調査研究はほとんど行われていない。至急調査・記録、研究を行っていく必要がある。

2 「雲切目薬」について

（1）「雲切目薬」の概要

「雲切目薬」の由来は、天文12年（1543）に鉄砲伝来のポルトガル人から製造方法を伝授されたという〔笹川ほか 2004 245〕。現店主の笠原久美子氏によると、代々言い伝えられてきたとのことで、古文書類は残されておらず詳細は不明とのことである。また、これとは別の由来も笠原十兵衛薬局には伝わっている。それは、天文12年に元祖笠原十兵衛が善光寺如来から授けられた霊薬で、善光寺如来夢想の目薬として売られたというものである（写真2）。いずれにしても、伝承としては天文12年に製法を授けられたという点は同じである。現在の笠原十兵衛薬局には明治期以前の史料は残され



写真1 現在の雲切目薬

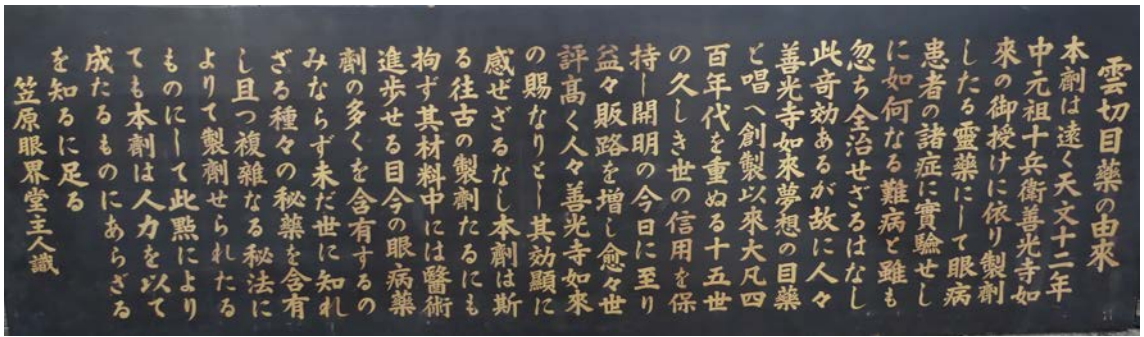


写真2 「雲切目薬の由来」

表1 『諸国道中商人鑑』より筆者作成

番号 (掲載順)	名称	効能	店舗名	所在地	備考
1	太平薬	小児五疳、驚風ほか	山城屋	権堂町	「取次」
2	家伝 おこりの妙薬	瘡	林屋八右衛門	権堂町	
3	家伝 朱鳥油	脚気、足の痛みなど	堺屋弥右衛門	大門町	「回春堂製」
4	具体的名称なし	記載なし	茗荷屋門左衛門	大門町	「男女御入歯 口中一切の療治処」 「丸散丹円膏壳弘所」
5	家伝金生丸	腹一切	佐藤屋長右衛門	東町	「御袋物仕立処 印伝唐革細工」
	家伝しろした こした 妙薬	白下、「こした」は「こしけ（白带动下）」か			「蜜或ハ乳にてとき、口中に入れべし」
6	御目薬	記載なし	笠原十兵衛	東大門伊勢町	
7	長寿湯	疱瘡、麻疹	玉屋清四郎	善光寺仁王門内左り側五軒目	「弘所」
	万能香	記載なし			
	仙女香	記載なし			
	救命丸	記載なし			
8	家伝 あしの妙薬	「あし」	双松堂林左衛門	仁王門上ル三軒目	
9	角力赤膏薬	記載なし	海老屋寅五郎	善光寺御地内しやかどうの側	

ておらず、現在確認できる最古の史料が次にあげ
る『諸国道中商人鑑』である。

(2) 史料にみる「雲切目薬」と善光寺門前町の
売薬

(2-1) 『諸国道中商人鑑』（江戸時代）

『諸国道中商人鑑』（中山道・善光寺之部
全）は、復刻版の序文によると文政10年（1827）
の発行である〔竹野 1989 2〕。この冊子につ
いては、復刻版解説にて尾崎行也が詳しく解説して
いる〔尾崎 1989〕。それによると、諸国道中の商
人や宿屋、薬屋などを掲載して旅人の便に供する目
的で作られたものであり、板橋宿を起点として善光
寺仁王門を終点としている〔尾崎 1989 6-9〕。

ここでは、善光寺・善光寺権堂町・善光寺大門
町・善光寺仁王門の各部に収載された薬について見
ていきたい。表1は、該当部分の薬を商っている店
舗名と薬名、所在地を掲載順に記載して一覧表にま
とめたものである。ここには「笠原十兵衛」の
「御目薬」を始めとして、薬を販売している店が9
軒ある。「取次」「請売」という文字が備考欄に
見える通り、他所の売薬を代理販売している店舗が
4軒ある（番号1,3,4,7）。残りの5軒（番号
2,5,6,8,9）が自家製薬をしていたと見るこ
とができるが、そのうちの3軒（番号5,8,9）は、薬以外
のものも販売している。そのため、薬のみを扱う薬
舗は「家伝 おこりの妙薬」を扱う林屋八右衛門
と「御目薬」を販売する笠原十兵衛であった。少
なくともこの2店は薬商いのみで経営ができてい
たのであろう。

(2-2) 「開明長埜町新図」（明治時代）

明治11年に長尾無墨が著した『善光寺繁昌記』
を、小林一郎が現代語訳して長野郷土史研究会のテ
キスト『善光寺繁昌記』として出版している。その
冒頭に「明治11年秋の長野」として、「開明長埜
町新図」が掲載されている〔長尾（著）・小林
（訳） 2008 6-7〕。この下段に「物産及製作品
表」が掲載され、そこで様々な業種が取り上げられ
ている。これは、その中に「製薬」として笠原十兵
衛をはじめ、3軒の薬屋が挙げられている（表
2）。また、「薬舗」として3軒掲載されている。
「薬舗」は薬を請売り販売する店舗を指している。
「製薬」「薬舗」が別記載となっているのは次の事

表2 「開明長埜町新図」より筆者作成

番号	名称	店舗名	所在地	掲載欄
1	龍虎門	青山仲菴	記述なし	製薬
2	めぐすり	笠原十兵衛	伊勢町	製薬
3	保寿散	湯田式右衛門	記述なし	製薬
4	記述なし	鼠屋磯五郎	東町	薬舗
5	記述なし	永寿屋多七	大門町	薬舗
6	記述なし	小升屋徳兵衛	大門町	薬舗

情による。明治10年（1878）に政府は、「売薬規
則」を公布し、薬剤1方につき1ヶ年2円を売薬
営業税として課すことにした〔清水 1949
200〕。この対策として、各薬店は売薬を一時廃業
し、製造を分担して少数の代表者を決めて、免許を
取得し、他は請売りの形式で税を逃れる方法を講
じた〔清水 1949 200〕。この結果、免許を有
して製造販売する少数の専門業、すなわち「売薬本
舗」が発生した〔清水 1949 200〕。これは結
局、税金対策が資本の一極集中をもたらしたとい
うことになる。個々の薬店がそれぞれ独立して薬を
製造販売していた関係から、大きな資本を持つ「本
舗」と薬の販売のみを行なう「小売」という関係
へ再編されたのである〔越川 2005 57-58〕。

「めぐすり」を扱う笠原十兵衛はじめ、「製薬」
欄にある3店舗は上記で言う売薬本舗であったと
いえるだろう。請売りの小売のみしかできない「薬
舗」と異なり、天文年間からこの地で製薬販売を
行っていた笠原十兵衛はすでに売薬本舗化できるだ
けの資本力を持ち合わせていたのである。

(2-3) 『善光寺独案内』（明治時代）

明治30年（1897）発行の『善光寺独案内』とい
う冊子がある。これは善光寺のガイドブックとでも
言うべきもので、読んで字のごとく一人でもこれを
片手に善光寺はじめ周辺の名所を巡ることができ
る。筆者の所有する明治31年（1898）再刷版の巻
末には、「諸買物ニ為便利格別勉強ノ店ヲ記ス」
として長野市街の店舗の広告が24頁に渡って掲載
されている〔三上 1898〕。雑貨や写真、茶、酒、
呉服など様々な店舗の広告があるなか、売薬の廣
告が目立つ。ここでは『善光寺独案内』に掲載
された売薬店舗の広告を見ていきたい。

表3が、掲載されている売薬広告の一覧である。
掲載全店舗89軒中、薬を扱う店舗は14軒である。

表3 『善光寺独案内』より筆者作成

掲載順	名称	効能	店舗名	所在地	備考
1	雲切目薬、白煉目薬	眼病一切	眼界堂 笠原十兵衛	伊勢町	「附言 請売御望ノ方御申込アレ直ニ手續致シ差上候也」
2	諸高名売薬（具体名なし）	記載なし	永寿屋 北澤本店	大門町	
3	諸大家売薬（具体名なし）	記載なし	小升屋号 小林傳兵衛	大門町	
4	諸大家売妙薬（通毒丸、胃散、実母散）	記載なし	北村長次	石堂町	「調剤所 長野市石堂町北村薬館」
	複方規鉄丸	胃弱、貧血など			
	雲切真珠散	星眼、鳥目など			
	腹胃加答児丸	消化不良、胸痛など			
5	真霊丹	外感病、小児五疳など	藤屋号 滝澤嘉助	大門町	
	解熱散	感冒			
6	有効売薬（具体名なし）	記載なし	隆盛堂 鹿住屋伊兵衛	後町	
7	黴毒丸	かさ一切	釜鳴館 中島孝助	元善町	
8	静靖丸	頭痛	千歳屋号 宮原清作	立町	「大取次販売所」 「本舗東京高木与八郎製」
9	諸大家売薬（具体名なし）	記載なし	小升屋号 西條市兵衛	大門町	
10	有効売薬（具体名なし）	記載なし	上野屋号 小坂定次郎	新町	
11	有効売薬（具体名なし）	記載なし	上野屋 山本安兵衛	新町	
12	岩間水	血眼、ただれ目など	永寿屋号 北澤為三郎	大門町	「御目薬 岩間水大販売所」「右御請売望みし御方は下各々御申込被下度候」
13	雲切光明香	血眼、ただれ目など	小山愛正堂	元善町	「善光寺の霊薬」 「調剤所 薬舗 小山愛生堂」
14	善光丸	疝気、寸白、癩など	善光堂 茂木辨藏	栄町	「右売薬請売御望ミ仕方ハ御来談を乞近頃当市え家製善光丸にまぎらハしき同名薬を行商致す者有之候間御購求之際ハ本舗茂木弁藏を御見留之上御購求被下度願上候」
	善製散	虫歯、口熱など			
	明治水	はやり目、ただれ目など			
	善能膏	腫れ物一切			

表中の「名称」で、「諸高名売薬」「諸大家売薬」となっており薬の名称が記載されていないものがある。これらについては9番の「小升屋号 西條市兵衛」の広告中に「諸大家売薬取次」という一文があり、有名売薬の請売販売をしていたことがわかる。「雲切目薬 白煉目薬」広告には、附言として「請売御望ノ方御申込アレ直ニ手続致シ差上候也」とある。笠原十兵衛薬局の現店主、笠原久美子氏によれば「眼界堂 笠原十兵衛」では、創業から自店舗で製薬・販売していた。また、「調剤所」という文字が見える北村薬館も自店舗で製薬し販売していたのだろう。このような自店舗で製薬・販売をした売薬本舗と思われる店は6店舗である。

効能が確認できる薬は13種あり、胃弱、感冒、虫歯、疝気など様々な効能が看取できる。なかでも目薬は6種にのぼり、半数近くを目薬が占めていることになる。「笠原十兵衛」の「雲切目薬」の「雲切」を冠した目薬も複数認められる。

また、笠原十兵衛のみ広告ばかりでなく、本文にも「雲切めぐすり 伊勢町 眼界堂 笠原十兵衛氏製」と記述がされている〔三上 1898 14〕。同じ頁には、「茂助鉱泉」「養蚕神社」「関伽井」「動物標本屋」などの新旧名所が並んでおり、「雲切目薬」は他の広告のみの薬とは一線を画す存在であったことが窺えよう。

そして、上記の諸史料すべてに登場する店は笠原十兵衛のみである。文政11年の『諸国道中商人鑑』には、9店舗、12種の薬が掲載されているが、明治11年(1878)の「開明長埜町新図」には、同一名の薬は存在せず同一名の店舗は笠原十兵衛のみが確認できる。また、明治31年(1898)の『善光寺独案内』には、14店舗、15種類の薬が掲載されているが、上記に掲載されている店舗で同一と確認できるものは笠原十兵衛のみである。『善光寺独案内』は薬店の掲載数も多く、現在も営業している小山愛正堂(現コヤマ薬局)や永寿屋北澤本店(現永寿屋本店)もあり、その他新興と思われる薬店も多い。近世から近代にかけての厳しい生存競争のなかをくぐり抜けてきたのが笠原十兵衛であった。

(2-4) 「雲切目薬」の名称について

「雲切目薬」の名称が使われ始めたのは明治時代以降らしい。上記史料中では「雲切目薬」と明記

されているのは『善光寺独案内』のみで、それ以前は「目薬」「めくすり」となっている。また、昭和7年発行の『信濃の誇り』では「三国一の弥陀如来善光寺の御膝元にあつて古来から有名な家伝薬『十兵衛目薬』の本舗とし知られている笠原家は又由緒正しい素封家としても近隣に響いている。」という記述がある〔小室 1932 136〕。加えて、現店主の笠原久美子氏によれば、非常にしみる目薬であったので「急いでさすなよ十兵衛目薬」という言葉があったという。商品名こそ「雲切目薬」であったが「十兵衛目薬」とも呼ばれ、その呼称にも馴染みがあったのだろう。

3 笠原十兵衛薬局に残された製薬・販売道具

2024年から2025年にかけて、笠原十兵衛薬局店主の笠原久美子氏からご快諾いただき、勤務する大学の学生3名と製薬・販売道具の記録を行った。限られた時間のなかでの作業であったため、今後丁寧に調査しなおし記録を更新・修正していく必要がある。本稿では、笠原氏からお伺いした「雲切目薬」の製薬方法を記述しながら、関連する資料を見ていきたい。

笠原十兵衛薬局に若い時から製薬販売に携わってきた従業員の男性(1925年生)が残した製薬手順を記したメモが残されている。それに加え店主の笠原久美子氏の聞書から「雲切目薬」の製薬方法を述べる。

(1) 工程1

まず、笠原十兵衛薬局では「四剤」と称していた次の材料を薬研で粉末にする。薏苡仁(ヨクイニン、ハトムギの粉末)と黄柏(オウバク)、硫酸銅の結晶粉末、真珠(家伝の秘薬で真珠貝とは異なる)を粉末にした「四剤」に金箔を入れ、ふるい(写真3)にかけたものを自宅でかつて祀られていた薬師如来に供える。薬師如来に感謝の意を表す笠原家の行事であるという。

(2) 工程2

次に樟脳をアルコールで溶解する。乳鉢に入れ乳棒でアルコールが揮発するまで摺り微粉末にする。方解石、長石、滑石、酸化亜鉛をそれぞれ粉末処理し、上記すべてを混合し練る。これに蜂蜜を入れて練る(写真4)。蜂蜜は酒で煮て柔らかくし、不



写真3 ふるい



写真4 蜂蜜を保存する器

純物を取り除いたものを瓶に入れて保存したものを
用いる。蜂蜜を入れて練ったものに唐墨を摺った墨
汁をいれ、3日間練り合わせると飴状になる。これ
を貝殻容器に入れて完成となる。

(3) 容器

貝殻容器は、ハマグリを使用する。俵に入れて送
られてきたアサリくらいの大きさのハマグリの殻2
枚をブラシを使って湯でよく洗う。その後に貝の殻
を合わせて銀の棒を使用して薬を2〜3グラム程度
挿入する。大正時代頃から貝殻からアルミの容器
に変更した。

明治時代から大正時代にかけて、ガラス容器に天
水で目薬を溶かして販売するようになり、爆発的に
売れたという(写真5)。ガラス容器に薬が沈殿す
るのでよく振ってさすように指導したという。これ
以降、目薬は練薬からガラス容器の点眼薬に移り変
わっていった。

笠原十兵衛薬局では、「雲切目薬」と並んで「白
煉目薬」という目薬も販売していた。これは、「雲



写真5 「雲切目薬」ガラス容器

切目薬」の製薬過程で入れていた墨汁を使用しな
いで練り合わせたものである。やに目やただれ目に
特に効いたが、痔にもよく効くと言われた。

上記の工程による製薬は、現在の笠原十兵衛薬
局の家屋内と、裏庭に建てられた製薬所において行
われていたが、薬事法規の影響により1982年に中
断された。その後、1998年に製薬会社へ委託製造
をすることにより、復活販売することとなる。

(4) 工程に関する若干の考察

工程1と工程2の間には、薬師如来への祭祀の
有無という明確な差異が見られる。主成分のオウバ
クと家伝の「真珠」を用いているところからも、工
程1こそが「雲切目薬」の中心であるとみなしてい
るのであろう。製薬手順を記したメモによると、
工程2の製薬法も鉋物を用いる点を独自の家伝と
はしているものの、前者とは明確に分けようとする
意識が看取できる。

4 「雲切目薬」の容器の変遷

笠原十兵衛薬局には、1982年に製薬販売が中断
されるまでの「雲切目薬」の容器が残されている。
ここではそれらについて見ていきたい。

写真6、7は、練薬の「雲切目薬」の容器であ
る。これら以前の容器はハマグリの合わせ殻であ
ったが、それは現存していない。アルミ容器が1.5グ



写真6 「雲切目薬」アルミ容器



写真7 「雲切目薬」プラ容器



写真8 「雲切目薬」ガラス容器

ラム入りで、プラスチック容器が2グラム入りである。これらは1982年まで用いられていた。写真8は点眼薬の「雲切目薬」である。最も古いものが先述の写真5で、ガラス瓶に棒を入れて棒についた目薬を目にさしていた。写真8は昭和10年頃から昭和40年代まで販売されていたもので、瓶にゴムをつけたものである。ゴムを押して点眼することができた。これがプラスチックの容器にかわったのが写真9である。プラ容器は一度五角形のものに容器を変えた後、1982年の販売中止へ至っている。

5 善光寺周辺の眼病平癒の信仰と「雲切目薬」

笠原十兵衛薬局で販売されていた「雲切目薬」の



写真9 「雲切目薬」プラ容器と箱

由来には先述のように複数の由来がある。善光寺如来の夢想により感得したという由来から、パッケージに「善光寺霊薬」と銘打っているものがある。ここでは、「雲切目薬」に付随する信仰的要素について若干の検討を行いたい。

(1) 笠原十兵衛薬局に残る地藏像の印



写真10 地蔵印版木



写真11 地蔵印版木

笠原重兵衛薬局に、地蔵像の印版木が2点残されている（写真10、11）。大きさは縦5cm、横4.2cmである。底の厚さは2.3cmであり、ここに地蔵の姿が彫られている。側面には墨書があり、次のように読める。「梵語（カ）開眼」「大僧都□□施与之」、「梵語（カ）開眼」「大僧都亮□□施印」。この2点の印が同一人物によって授けられたものかは、現段階では判断できない。「開眼」という文字は目薬を頒布する店であることから、眼病治癒を示すと思われるが、この印について伝える文書は存在せず、この印について知る人物も存在しない。頻繁に使用していた痕跡が認められるので、薬を求める客に地蔵印を押して渡していたのだろう。

（2）善光寺及び周辺の眼病治癒信仰

『信州善光寺御堂額之写』という冊子がある。小林計一郎によると、善光寺に奉納された絵馬を解説した木版刷りの小冊子で、善光寺の境内や門前で参拝土産として販売されたものである。ここには、善光寺如来の靈験が述べられている。小林計一郎がこの全文を翻刻しているので〔小林 2000 921-925〕、それに依拠して述べていきたい。

本冊子に掲載されている絵馬は14枚である。なかでも年号が記されているものは9枚あり、それらは寛政6年（1794）から天保4年（1833）のものである。14枚中病氣治癒のご利益を述べたものが

7枚ある。そのなかでも眼に関するご利益を語ったものが4枚あり、例えば次のような記述がある。

中仙道追分宿甲州屋次郎右衛門、がん病を長くわづらひ、目つぶれしかば、同国にまします善光寺如来さまへ心願いたし、せめてはすこしのあかりにても見まほしく、一七日間だんじきにてつや心願いたし、七日まんずるあかつきに御とうみやう見へければ、いよ／＼有がたく念仏申居しに、よのあけるにしたがひ、仏前あり／＼とおがみければ、まことに／＼ありがたく、そのまゝを忍まにして、御りやくを人々にしらせ申たく、がくを納申候。

そして、巻末では次のように語られる。「右此がくのごとく、もうむくの目をひらき、いざりのこしをたちしなどは、みな忍えをおさむ。あまたなりければりやくし、これをのみしるす」眼や足腰に対するご利益により御影を奉納したものが非常に多いが、一部のみの紹介にとどまる旨が述べられている。冊子中では眼が半数にのぼり、善光寺のご利益として眼病治癒が多く語られていたことが示唆されている。小林は、この冊子は境内で売られていた土産であろうと述べている〔小林 2000 925〕。このような土産を通じて、善光寺のご利益が全国に広がっていったならば、江戸時代後期には善光寺の眼病治癒信仰も広く知られていたことが窺える。

現在善光寺で眼病治癒の信仰として知られているのは、境内にある「爪彫如来」と呼ばれる阿弥陀如来像である（写真12）。「爪彫如来」の立て看板には次のような説明がある（2025年12月現在）。「浄土真宗の宗祖親鸞聖人は、越後から東国への旅の途中、善光寺に百日間逗留されたと伝わっています。この阿弥陀如来は、聖人が逗留中に詰めで掘られたものといわれ、特に眼病を治してくださる仏さまとして篤く信仰されています。」この説明の通り、この像が安置されている堂の前には眼病祈願の絵馬が多数かかっており、現存の眼病治癒信仰であることを窺わせている。

この信仰はいつから存在しているのだろうか。先述の『善光寺独案内』には、次のような記述がある〔三上 1898 13〕。



写真12 爪彫如来

爪彫の阿弥陀仏

経蔵の後にあり法道仙人如来の御来迎を拝し石に彫付たる石牌なり文字ハ磨滅してわかりかたし法道仙人ハ天竺三十六神仙の内の一人なり奇瑞多し

この冊子は、明治31年（1898）に発行されているが、これには眼病の記述がないばかりか、親鸞が彫ったのではなく法道仙人が彫ったとされている。明治36年（1903）に発行された『善光寺名所図会』という冊子には次のようにある〔石倉1903 148〕。

爪彫の弥陀

経堂の西にあり、見真大師が爪にて石に阿弥陀如来の像を彫りたりと伝ふ。裏面には南無阿弥陀仏の文字を刻み、幾多の参詣者は石刷りとして家苞とすとかや。

ここにも、眼病治癒に関する記述はなく、見真大師（親鸞の諡）が彫ったものと説明されている。明治37年（1904）に発行された『長野繁盛記』という文献を参照すると、「親鸞の爪にて刻まれたる阿弥陀の像あり」と述べているものの法道仙人

説も紹介している〔岩井 1904 39〕。爪で阿弥陀如来を彫った人物に揺れが見られるのであるが、いずれにしても眼病治癒については言及がない。明治30年（1897）から大正7年（1918）までに出版されている8冊の冊子を参照したが、そのいずれにも眼病治癒信仰の記述を見つけることはできなかった。これらが民間信仰的な記述を避けている可能性も指摘できるが、『長野繁盛記』には手を入れると皮膚病が治る穴が紹介されており〔岩井 1904 40〕、『善光寺案内記』には賓頭盧が紹介されていることから〔倉島 1912 4〕、この時期の「爪彫如来」に眼病治癒信仰が付随するのはこの時期より後であると見るのが自然であろう。

おわりに

笠原十兵衛薬局に伝わる「雲切目薬」について、その歴史および製薬法や道具などの物理的な側面と信仰的側面からの若干の調査報告と考察を行った。

笠原十兵衛薬局は、明治24年（1891）の善光寺大火の被害を受け全焼しており、古文書類はその際にすべて焼けてしまったという。文献資料からのアプローチは、善光寺を含めた周辺諸史料からの検討が必須であり、今後も継続して調査していく必要がある。製薬・販売道具類については、写真撮影と記録を行った。今後資料の聞き書きなどを継続させていただき、資料の充実化をはかっていきたい。

また本稿では、「雲切目薬」の信仰的背景の存在を意識して善光寺と周辺の眼病信仰を探ってみた。善光寺に奉納された額や絵馬には、眼病快癒の類のものが見られる。神社仏閣の現世利益信仰の一環としてそれは位置づけられるし、「雲切目薬」の由来を生み出した背景としてその存在は指摘できるだろう。善光寺史料館に多くの絵馬や額が展示されているが、それらを詳細に調査できれば、善光寺における眼病治癒を含めた現世利益信仰の具体層が明らかにできると考えている。「爪彫如来」については、現時点では近代史料においても眼病治癒の信仰が確認できなかった。最勝院の「須磨薬師」も、現在眼病治癒のご利益があるといわれているが、これらの歴史的検討も今後の課題である。

また、笠原十兵衛薬局に残されている地藏印は、

「雲切目薬」と直接関わる重要な信仰要素である。これを授与した僧についての研究と、善光寺とその周辺寺院展開されている地藏信仰との関連性も検討していきたい。

謝辞

本研究にあたり、笠原十兵衛薬局第18代店主、笠原久美子氏には、資料の提供ならびに聞きとり調査へのご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

付記

本研究はJSPS科研費 JP25K04688の助成を受けたものです。

参考文献

- ・池田嘯風 1929 『日本薬業史』薬業時論社
- ・石倉重継 1903 『善光寺名所図絵』博文館
- ・岩井熊蔵 1904 『長野繁盛期』銀杏堂書店
- ・尾崎行也 1989 『復刻 諸国道中商人鑑 中仙道・善光寺之部 全〈解説〉』郷土出版社
- ・倉島元彌（編） 1912 『善光寺案内記』仏都新報社
- ・越川次郎 2005 「三澤家と伊那部宿の売薬」川崎市立日本民家園（編）『旧三澤家住宅』
- ・小林計一郎 2000 『善光寺史研究』信濃毎日新聞社
- ・小室繁夫 1932 『信濃の誇り』進脩社
- ・笹川伸雄・日刊ゲンダイ「妙薬探訪」取材班 2004 『妙薬探訪～からだにやさしい生薬百選～』徳間書店
- ・竹野半兵衛 1989 『復刻 諸国道中商人鑑 中仙道・善光寺之部 全』郷土出版社
- ・長尾（著）・小林（訳） 2008 『善光寺繁盛期 一明治十年、長野のにぎわい』光竜堂
- ・三上真助 1898 『善光寺独案内』